

昭和30年代の地方都市社会福祉協議会会報の特質

— 『上田社協ニュース』に掲載された「小河滋次郎博士小伝」を事例として—

○ 高知県立大学 中嶋 洋 (005048)

キーワード: 『上田社協ニュース』, 小河滋次郎, 広報

1. 研究目的

本発表は、戦後復興期にあたる昭和30年代に、社会福祉協議会（以下、社協）関係者たちが広報活動をどのように企図し、社会福祉事業をいかに進めようとしていたのかを定期刊行物の特集記事に着目し、明らかにしようとするものである。勤評闘争と称され、互助共励事業が盛んだった1958年当時、社会福祉事業への理解や話し合いを重視していた上田市社協は、定期刊行物『上田社協ニュース』（以下、同紙）などの広報媒体の活用を模索していた。特に、同紙第6号～第13号に「小河滋次郎博士小伝」を7回シリーズで報じ、伝達情報と人々の実践とを結び付けようと苦慮していた。本発表では、同市社協会報特集記事を分析し、同市社協の広報活動が果し得た役割を探究することを目的とする。

ところで、戦後、慈善から福祉へと大転換を目ざしていた社協に関し、広報活動を取り上げた先行研究としては、地域組織化の視点から広報活動にアプローチした原田（1969a・b；1971）をはじめ、施設の社会化から広報のあり方を問うた村岡（1978:8-11）、対象別に情報を届ける必要性を訴えた久松（1985:52-7）、広報紙の「ムダ使い」を問題視した山本（1986:64-9）などがある。なかでも、村岡は広報を種類分け、その役割や存立意義を問うている。その反面、社協による普及・宣伝活動の効果として、それらが実際、地域住民にどのように受容されてきたのだろうか。また、社協会報などを通じ喧伝された記事内容はいかなる史的根拠に基づき報じられてきたのだろうか。

2. 研究の視点および方法

上記問題意識について、「広報の『受け手』がどのような広報の『送り内容』を受取り、理解しているかについては、疑問なきを得ない」と原田（1969c:46）が疑義を示すように、旧来、地域組織活動に関する広報の問題は、受け手の側に立った検討が十分になされておらず、分析視角も明確にされてこなかった。このことは、広報の効率化に留まらず、広報本来の役割を再考することにも関わるため、看過できない。とりわけ、人々に身近な社協会報の分析は重要であり、その特質を、受け手の立場を勘案しつつ考証することは、相手中心の支援や地域包括ケアを基本とする社会福祉学の観点からも意味深い。

そこで、本発表では、民生委員制度創設40周年記念第1回総合大会が開催された年に創刊された『上田社協ニュース』（以下、同紙）の創刊号～第68号（1957年～1977年）という約20年間分を検討素材とする。なかでも同紙第6号（1958年7月5日発行）～第13号（1960年2月10日発行）に7回にわたり連載された「小河滋次郎博士小伝」に焦点を

絞って論じる。こうしたある事柄に特化した連載記事の内容や構成から、当時の社協関係者の意図や思惑を看取り得るとするのが本発表の視点である。

3. 倫理的配慮

一方、倫理的配慮としては、筆者の所属先の大学研究倫理審査委員会の承諾を得て調査を行った。加えて、資料の引用許可を上田市社会福祉協議会事務局長（当時）の宮之上孝司氏から得た（2014年9月2日）。なお、用語の使用については、戦前・戦後の双方の資料を用いるため、社会事業と社会福祉事業が混在しているが、原文に従いそのまま用いることとし、あえて用語の統一はしない。旧漢字などについても同様の扱いとする。

4. 研究結果

昭和30年代の地方都市社協の定期刊行物において、小河滋次郎が特集の連載記事に登場したのは何故だったのか。ここでは3点にまとめ得る。第1には、社会福祉事業への理解が乏しかった時代に、上田市出身の小河に焦点化し、同郷の偉人としての存在意義を多くの人々に伝えることで、社会福祉事業への関心を高めようとしたことである。第2に、「社会全体の連帯責任」という考えへの批判に対する対抗のためである。第3に、愛に基づく実践のみでは継続し難く、その発展を持続させるためである。加えて、同紙や小河の論稿など、第一次資料を分析すると、多くの人々が親しみやすいように評伝形式にしたこと、段階的な理解のために連載としたこと、未完であった小河の将来構想を人々に投げ掛けたこと、小河への共感を増幅すべく彼の著作や博論が詳述されたことなどが明確になった。

5. 考察

上田市社協の広報活動の一端として、小河の思想がどのような経過や背景をもって伝達されようとしたのか、そこには社協関係者のいかなる思いがあったのかを同紙の分析を通じ、明確にしようとした。その結果、小河に関する情報提供を段階的に行うことで、徐々に同胞という意識をもつ人々を増やすことが志向され、こうした広報戦略のなか、実践や苦悩のなかからうみ出された知見や考察こそが地域社会や人々の暮らしの力になると重視された。また、地方都市社協会報の内容分析から、情報の受け手から主体的な担い手側への重心移動と、社会福祉への理解の促進や組織化の試行が見出し得た。

さらに、同紙を通じ、小河が後世に残した少なからぬ課題を知らしめたことが、小河という一人物だけではなく地域住民一人ひとりに光を当てなければならないことに加え、社会福祉事業の組織化・体系化を促す契機となっており、大きな意義があったと言えよう。他の論説・記事とは色彩が異なり、限定的な記述も見られたが、当該特集記事は、上田市社協が社会福祉事業の振興を旨とした背景や経緯を広報面から知る例証の一つとなっていた。ここに、地方都市社協における広報が果たし得た役割の一端を看取できよう。